MERI Japan News

メリジャパンニュース
2023年7月10日発行 VOL. 17 no.1

The Human 識者に聞く

**北海道公立大学法人札幌医科大学は、1999年（平成11年）より
キャダバーサージカルトレーニング（以下CST）への取り組みを開始した、いわば、我が国におけるCSTのパイオニアです。
現在はサージカルトレーニングセンターを有し、同センターで活躍するのが陸上自衛隊出身の樋口泰弘氏。
CST実施に関する管理、ルールづくりなどを再構築し仕組み化するなど、
同大学のCSTへの厳しい姿勢を、まさに体現する「研究支援の専任職員」です。**

篤志献体された方の意思を貫き通すために、すべてのサージカルトレーニングに立ち会う。

北海道公立大学法人
札幌医科大学
サージカルトレーニングセンター
研究支援職員
樋口 泰弘

1986年防衛大学校応用物理学科卒業。1987年防衛省・陸上自衛隊入隊。2017年防衛省・陸上自衛隊退職。2020年プロパンガス販売会社勤務を経て、札幌医科大学解剖学第二講座サージカルトレーニングセンター勤務。2022年札幌医科大サージカルトレーニングセンターが大学の組織化され現在に至る。

医師や各診療科間のきめ細かな調整で、年間実施システムを仕組み化する。

— サージカルトレーニングセンター（以下センター）研究支援職員である樋口さん。現在のお仕事内容からお聞かせください。

樋口　まず、次年度のCSTの年間予定表作成があります。そのため、前年度の年度末にあたる1月～3月に、トレーニングを希望する各診療科の担当医師に、時期や必要なご遺体数の聞き取りを行います。すべてお聞きしたうえで、3月末に担当者会議を開催。皆さんにお集まりいただき、各科の要望の擦り合わせ、日程調整などを実施します。医師のなかには、CSTが初めての方もいますので、ガイドライン理解の勉強会開催、大学ルールの徹底、手続きの徹底、そして、必要機材の確認へと進めていきます。その後には、教授クラスにお集まりいただき運営委員会を開催し、申請書類審査のために、CST全体のご説明をいたします。

札幌医科大学の解剖実習室（サージカルトレーニングセンター）

— いわゆる現場の細かなところを調整したうえで、教授の審査へと進めていくわけですね。

樋口　そうですね。5月～6月になると、各科からの申請書類がたくさん出てきます。それをまず私が、主に書類上の不備がないか、一つひとつ確認をする。不備があれば担当医師とのやり取りで整える。そのあとにまた運営委員会を開き、教授に審査へと入っていただくという段取りです。

— なるほど、次年度のCSTの年間予定表作成を作るために、審査までの工程を、センターの事務方として、樋口さんがずっと面倒を見られているのですね。

樋口　はい。CSTは8月から一気に始まります。それとは別に学生の解剖実習がありますから、前段階として、大学に入ってくるご遺体を技師と一緒にすべて見させていただいて、実習とトレーニングのどちらに使わせていただくか、決定の場への立ち会いをいたします。そして、ご遺体の防腐処置であるシール固定、また、診療科によっては、医師によりご遺体を診察したうえで、ホルマリン固定、冷凍固定などを行うのに立ち会います。CSTが始まると、医師たちにもう一度ご遺体の確認、注意事項の説明、実習に使用する機器の業者との調整を行います。この他の仕事としては、運営委員会へのCST実施報告付議、日本外科学会への報告、ご献体の管理、そして、解剖学講座業務（技師）の支援などがあります。

篤志献体を使っての貴重な学びと研究。だからこそ医師にも言いたいことを言う。

— お話しいただいたCST実施のシステムというか、手順というのは、貴学ではすでに構築されていたのですか?

樋口　担当者会議などは、私が来るまではなかったですね。

— では樋口さんが、システムを構築されたということですか?

樋口　まったくゼロから作ったわけではありません。細かな準備の要領だとかは、前任者の申し送りがあったので、工程全体を見渡し、必要に応じて調整をするなどして、現在のシステムを構築していきました。

— 樋口さんご自身もトレーニングに入られるのですか。

樋口　はい。僭越ですが、参加される医師たちがルールを破っていないか見させていただいています。というのは、お一人のご遺体は、何人もの医師による複数回、さまざまな部位のトレーニングに使わせていただきます。そのためにはご遺体の状態をきちっと維持しなければならない。ご遺体保護のための監視ですね。トレーニング終了後は、片づけ、次の準備、そして、ご遺体の確認、処置を行います。

— 先程、事務方の仕事と表現しましたが、決してその枠には留まっていないお仕事ですね。

樋口　篤志献体された方は、「医師の研究、教育のための献体に同意する」と同意書のなかでお答えくださっている以上、医師たちが、「このトレーニングは成功だった」と思えることが重要です。そのためには事務的な準備だけではなく、ご遺体の固定時には立ち会い、特徴を全部メモする。トレーニングの立ち会いも同様。これはご遺体の管理には欠かせません。そうしたうえで、医師には篤志献体された方の意思を受け止め、しっかりと学んでいただきたいと思っています。

— 樋口さんの姿勢や行動力は、陸上自衛隊でのキャリアと繋がっているのでしょうか。

樋口　自衛隊で培ったことがベースにはありますね。例を挙げると、自衛隊では教育訓練を行うのですが、年度計画を立てる、担当者が顔を合わせ調整する、個別の実施計画を作るといった手順があり、その流れをここでも活かしています。なかでも一番重要なのは、自衛隊の訓練では本物の武器を使って行うため、物品管理が非常に厳しいのです。CSTで使わせていただくのは、本物の人ですよね。模型や動物ではない。だからこそ、非常に厳しい管理が不可欠だというのが、私の考えです。

整形外科卒後研修

整形外科ライブサージャリー

— トレーニングまで参加されるとなると、担当医師や教授からの樋口さんへの信頼は厚いでしょうね。

樋口　準備の段階、トレーニングで気付いたことは、遠慮なく言わせていただいています。皆さん、きちんと聞く耳を持ってくださるのが有り難いですね。

— 医師と対等に話ができる、また、注意もできる——。まさに「研修を支援する」人材という位置付けですね。

入職してすぐに出会った人々の高い意識、真摯な姿に、自らの仕事の本質を知る。

— センターにおいて、樋口さんご自身にとって、印象に残っていることは何でしょうか。

樋口　何人かの方との出会いですね。まずは本学への就職に際して、面接でお会いした内科医で解剖学の教授である藤宮峯子先生です。藤宮先生がおっしゃった「臨床医として、一人ひとりの患者さんの病気を治し救うというやり方もあるが、研究者になれば、何万人、何十万人の人を一度に救える可能性がある」という言葉に感銘を覚えました。それまで医療の知識は無かったのですが、研究の一番端に並ぶ意義を感じました。また、私が本学に来てすぐにCSTがあり、大学院生何人かがお手伝いをしてくれました。その方たちは、シール固定液でぬるぬるの状態のご遺体を、まったく気にせず、自分が固定液にまみれても、しっかり抱きしめて大切に移動させている。また、他の院生は、ご遺体を包んでいるシートがほんの少し汚れても、交換しましょうと熱心に言われる——。「ご遺体には尊敬の念を持って」とよく言われますが、この人たちはそれをまさに体現しているのだと、強く思いました。また、自分の若いときには

無かった腹腔鏡手術を学ぶために、CSTを希望し続けて、やっと参加することができたという、他大学出身の高齢の医師もいました。そういう方々にお会いして、「札幌医科大学には、こういう意識の高い方、真摯に学び続ける方が集まってくるのだ」と思いました。

— なるほど。それ自体が貴学のCSTのあり方を物語っていますね。

樋口　私にとってはこの仕事のための学びの第一歩。得難い出会いでした。

センター長
大﨑 雄樹（左）

副センター長
四ツ柳 高敏（右）

札幌医科大学サージカルトレーニングセンターを支える
センター長・副センター長

CSTの向上をめざし、施設・設備にも目を向け続ける。

— 樋口さんご自身のお仕事のなかで、一番苦心していらっしゃる点は何でしょうか。

樋口　そうですね…。苦心とは違いますが、ここに来た当初、CSTの流れを、まったく知りませんでしたから、担当者会議のときなどには、いろいろな診療科の医師に、複数回ご献体をトレーニングに使わせていただくにはどの手技から実習を行えばよいか、さまざまなことを質問しました。医師からすると、そんな基本的なことを聞くのか?という話です。でも今振り返ってみると、実習の順番は、診療科が異なると医師同士でも知らなかったと思うのです。私の質問がきっかけで、異なる診療科医師同士が話し合う機会が生まれ、これはこれで良かったと思っています。

— なるほど。では、樋口さんのお立場から、センター、あるいは、CSTに関する今後の目標をお教えください。

樋口　目の前の目標としては、CSTの質の向上ですね。固定処置法を見直すなど、より生体に近いご遺体でCSTができるように取り組んでいます。また、医療機器の拡充にも目を向けています。本学の医師の特徴として、CSTで使用する機器について、これが欲しい、あれが欲しいと自ら進んで言わず、有る物で我慢をする方が多いのです。徐々に、担当者会議で顔馴染みになった医師から、「実はこういうのがね…」という声も聞こえて来るようになったので、そうした面でも後押しできればと考えています。そして、CST専用の施設・設備の整備があります。実は、本学では学生が使っている解剖実習室で、CSTを行っているのです。実習室自体はまだ新しく、39台の解剖台を並べて同時に実施できる環境が整っています。しかし、質の高い学びと研究のためには、より良い環境が必要ではないかと考え、解剖実習室の一部をCST専用に作り替えてくださいと、大学に申請を出しています。もちろんこれはすぐにどうこうできるものではありません。

— 札幌医科大学は、CSTのパイオニアといわれていますから、施設・設備には恵まれているという印象を持っていたのですが、そうではないのですね。

樋口　はい。現状は、限られた環境・設備のなかで、皆が創意工夫しながら取り組んでいます。しかし、ご献体者の意思に応えるためにも、環境整備は重要だと私は思い、そのためには声を上げ続けようと考えています。

篤志献体された方、ご家族によって、成果は確実に上がっている。

— では最後に、今後、ご献体をいただく方、検討をされている方、また、実際にご献体いただいているご家族の皆さんに、樋口さんからメッセージをいただけますか。

樋口　はい。CST、つまり、ご遺体を使わせていただいて、医師が手術のトレーニングを行うことで、昨今、話題になっていた腹腔鏡手術の事故をはじめとする医療ミスは、確実に減っていると私は思っています。また、CSTによってスキルを磨いた医師が、各地域で患者さんの治療に活かし、命を救っているという事実もあります。それらはすべて、篤志献体してくださった皆さん、そしてご家族の皆さんのおかげです。本当に有り難いと思っています。ただ、残念なのは、CSTの成果が、一般の方の目に触れることは少ないということです。なかなか表面には出てこないこと自体、私自身は問題だと思っています。でも、本学の医師はもちろん、私たち研究支援職員は、篤志献体なさった方、ご家族の尊い思いをしっかりと受け止め、医学の向上、研究に全力を注いでいます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

取材を終えて

樋口さんは、CST実施に関する手続きを、実質ひとりで再構築するとともに、トレーニングの現場にてアドバイスをするなど、事務方だけに留まらない多様な業務を果たしている。その視線は環境づくりにも伸び、低予算での映像伝送装置を実現。従来、CST会場のモニタに密集していた参加者や見学者のために、音声付きの映像伝送、録画を可能にさせた。これが発端で、WEB会議システムを使ったライブサージャリーが実現するなど、いくつかの成果も生み出している。令和4年（2022年）に、センターを大学直属の組織とした札幌医科大学。CSTに対する確固たる意志を感じられるが、そのなかにあって、専従の研究支援職員の存在は、同学にとって大きな強みの一つと言えるであろう。

医療を育てる活動の輪に、あなたもご参加ください。

日本の医療技術の習得や開発は、私たちの、未来の日本のためのものです。外国の施設や善意にいつまでも頼るのではなく、医療の質と安全については、日本国民自らが負うべきではないでしょうか。メリジャパンの趣旨にご賛同いただける方は、寄付、またはご入会を受け付けておりますので、ぜひご協力ください。お問い合わせをお待ちしています。

◆ 会員の種別

会員の種別	特　徴	年会費
正会員	総会議決権を持つ会員です。 運営にも積極的に関わっていただきます。	個人会員　¥5,000 法人会員 ¥10,000
賛助会員	総会の議決権はありません。 活動を支援してくださる方が対象です。	個人会員　¥3,000 法人会員　¥5,000

※正会員・賛助会員ともに入会金は不要です。

ご寄付・ひとさーじ募金について

医療事故や医療過誤をなくし、高度な医療技術の普及をめざす活動を推進するための募金を行っています。

みなさんが、そしてご家族・ご友人がより高度な医療を安心して受けられるよう、医療の質と安全性の向上をめざす活動へのご協力をお願いいたします。

ひとさーじ募金をご希望の方

ひとさーじ募金とは医師の医療技術向上のための「サージカルトレーニング」を支えていただく、定期的な募金システムです。毎月1,000円の継続の寄付により、医師・医療を育てる活動に協力をお願いします。

1,000円は、1回のサージカルトレーニングで、ひとりの医師が着用するガウン・帽子・マスク等の費用に相当します。

お申し込み口数　**1口1,000円**より

法人での寄付・遺贈寄付をご希望の方

事務局までご相談ください。

TEL 052-784-8775　E-mail meri_info@hachiya.or.jp

銀行振込での募金・ご寄付ご希望の方は、下記のいずれかの口座へお振込ください。

- 名古屋銀行 覚王山支店
  普通3312469　口座名：トクヒ）メリジヤパン
- 三菱UFJ銀行 覚王山支店
  普通0120842　口座名：トクヒ）メリジヤパン
- ゆうちょ銀行
  12140 89381881　口座名：トクヒ）メリジャパン

（他行からお振込みの場合は
ゆうちょ銀行218支店 普通8938188）

※いただきました個人情報は、領収書、活動報告、市民講座のご案内などの送付に使用し、それ以外の目的には使用いたしません。
※振込手数料は、ご負担いただきますようお願いいたします。

編集後記

今回のニュースレターでは、キャダバーサージカルトレーニングのパイオニアである札幌医科大学の研究支援職員、樋口泰弘さんへのインタビューを掲載いたしました。

医療人ではなく、元陸上自衛隊の樋口さんがCSTの世界に出会い、様々な人との関りの中で札幌医科大学でのCSTのシステムを作り上げていった事が分かりました。

また、元自衛隊の樋口さんならではの真面目さ、厳しさ、正確さ、丁寧さ、心配り、先生方とのコミュニケーションがあって、札幌医科大学でのCSTがスムーズに行われていることを感じました。

どのCSTも先生方は、学びたいという熱意をもってCSTに臨まれます。その先生方がCSTに集中できるよう、私たちも今まで以上に、少しでもCSTの準備・周りの環境を整えるお手伝いができればと今回のインタビューを通じて改めて感じました。（M）

MERI Japan
特定非営利活動法人メリジャパン
〒464-0821名古屋市千種区末盛通2-4　はちや整形外科病院内
電話052-784-8775　E-mail meri_info@hachiya.or.jp
URL https://www.merijapan.org